

# 「普通の人」はいかにして社会貢献活動に参画するのか

## ——社会課題解決を目指したスポーツイベント運営のアクションリサーチ——

一橋大学社会学研究科・日本学術振興会特別研究員 DC1 糸数温子

### 1 目的と背景

NPO や社会貢献活動団体における「人材確保や教育」は常に大きな課題であり、従来その課題解決のアプローチは、共感をベースとした理念の共有できる人材確保と発掘に向けられてきた。しかし、とりわけ地域における実際の社会貢献活動では、主催者との個人的な関係を基盤とした集団であることも少なくない。そこで本報告では、特別な専門性を持たないような自称「普通の人」たちが社会貢献活動に巻き込む方法論について検証する。

### 2 対象と方法

本報告で分析を行う調査対象者は、社会課題解決型スポーツイベントを運営するスタッフである。主催者側の人間ではあるものの社会貢献活動の主体として自らを位置づけておらず、スポーツ経験の有無も様々で、主催者との個人的な関係が起点となっている者が大半である。使用したデータは、2012年の第1回大会から2019年の第8回大会までに大会運営に関わったスタッフの①関係者とのやりとりやミーティングの記録を中心にしたフィールドノートと②半構造化したフォーカス・グループ・インタビューの実施で得られたものである。

### 3 結果

a) 調査対象者は、本イベント運営について社会貢献的な活動であることは認めているものの自分自身の関与が直接的に支援に繋がっているという自覚はない。あくまでも「手伝い」であると認識しており、「利他」的な精神による活動だとしてもその貢献は「社会的な何か」に向けられているのではなく、あくまでも友人関係である主催者との関係に対して向けられている。b) 活動の参加前後を比べると、中心的な主催者と強い結びつきにあったがお互いに接点のなかったメンバーは、主催者との関係の親密度に応じた形で三者関係を構築し、お互いに繋がることで家族同士の付き合いや私的な時間に遊びに行くような経験が語られた。団体として強固なコミュニティとなっているわけではなく、個人的な時間を過ごす友人関係のままであり、主体的な活動家として個人や関係そのものが社会化されることはなかった。c) 2つのネットワークのブリッジとなる場合、似たような理念を共有できるネットワークを持つ場合は間を取り持ち、また所属する活動とそれとは異なる意見を持つ人々との間に「心理的緊張」がもたらされている関係では葛藤を抱えつつも折衝役となるなど重要な役割を果たしている。d) 参加する年もあれば中心的に動く年もあるなど「出入り自由」であり、出産や転職などの状況に合わせてそれぞれが出来る範囲で主体的に関わろうとする様子が見られた。e) 調査対象者により持ち込まれたネットワークは、脱・高階層傾向があるとは言い切れない。

### 4 結論

従来の社会貢献活動の発信はいかにして共感を生み出し行動へと繋げるかを重視していたのに対し、本報告では、個人的なつながりを「行動→共感」というモデルによって継続的な活動の担い手として確保するという戦略を採りつつも、そのような形で参画した人材が活動基盤を支えていることが明らかになった。このことから社会貢献活動における重要な「人材確保と教育」という課題に対して、強い個人ではない人々への参画の意義を見出すことができる。